

裾野秋期福音特別集会

主の祈り

——マタイ伝第6章1～15節——

1979年9月30日

小池辰雄

聖書は神のドラマ 宗教は根っこ 永遠の生命 一極絶対 神さまの中に自分が入っている
 神隠れ 超我 己を棄てて友を救う 戸を閉じて 神秘界 天の父 たえばこう祈れ 御名
 が聖とせられんことを 御名に在りて 御国は来ている 無者キリスト 十字架の贖い 一日
 を力いっぱい 天来の愛

【マタイ6】

1 汝ら見られんために己が義を人の前にて行わぬように心せよ。然らずば、
 天にいます汝らの父より報を得じ。

2 さらに施濟をなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街にて為す
 ごとく、己が前にラツパを鳴らすな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を
 得たり。3 汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。4 是
 はその施濟の隠れん為なり。さらば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん。

5 なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に躰さんとて、会
 堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその
 報を得たり。6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたる
 に在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。
 7 また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きにより
 て聴かれんと思うなり。8 さらに彼らに做うな、汝らの父は求めぬ前に、な
 んじらの必要なる物を知りたもう。9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます
 我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。10 御国の来らんことを。御意
 の天のごとく、地にも行われん事を。11 我らの日用の糧を今日もあたえ給え。
 12 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。13 我ら
 を嘗試に遇せず、悪より救い出したまえ」14 汝等もし人の過失を免さば、汝
 らの天の父も汝らを免し給わん。15 もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過
 失を免し給わじ。



●聖書は神のドラマ

聖書は、皆さんお一人一人に非常に質的に深く関わっておりますので、そのおつもりでお聞き願いたいと思います。新しいかたもいらつしやるので申し上げますけれども、聖書は、「キリスト教」と言つて、「教え」のように思いますけれども、これは教えではない。私はいつも、

「聖書はドラマである」

と言つています。神のドラマです。神劇です。絶対界から相対界に切りかかつて来るところの、非常に立体的な、また過去・現在・未来にわたる、次元的にも時間的にも永遠を土台としたドラマです。我々は信ずると信じないにかかわらず、その一環に必ずいるわけです。聖書はそういうドラマの展開として、世の始めの天地創造から歴史の終末の新天地の天界にいたるまでの壮大なものです。

仏教の世界は――私も仏教を尊敬して、いろいろなものをかじつておりますけれども――どちらかというところ、悟りが中心になつていようような真理です。そこにも大きな真理があります。しかし、キリストの道は悟りではなく、永遠の生命であつて、非常に生き生きとした事態です。

我々は地上でいくら長生きしても、百年程度のところでは、その先はどうしてかれるかと。地上は生命のごく端緒であつて、永遠の生命はそれからいくらでも続いて、神の国に至る。これは黙示録に書いてありますが、この黙示録も結局、黙示録に書いてあるとおりに来るといふのではなくて、その時に示された啓示の事態です。ですから、それがどのような現実になるかは、誰か知らんやということですが、けれども、そういう神の約束の 때가、また現実が来る。そういう壮大な望みにおいて、我々は生きています。そこに本当に人生の張りがある。この世においてどんなに悲惨な目に遭おうと、不幸な目にあおうと、絶対にそんなことでは屈しないという、素晴らしい希望が既に我々の日常生活の生活の中に現実となつて生きています。そういうようなつかみ方、これが本当の信なんです。

●宗教は根っこ

「信仰」というと、

「何かわからないことを、仕方がないから、信じておこう」

なんていうものではない。信は即ち現なり。現実である。人間の魂はそういつた、何がどうなつても絶対にそんなことでもつて動かないようなものを求めているんです。即ち、絶対的なものを求めている。相対ではなくて、相対を絶するのを絶対と言う。そうしたら、何をやつても、本当に楽しくなるんです。何をやつても、それが本ものになつてくる。

日本人は、なにか大学卒だとか、社会的な地位だとか、そういったようなことに、どうもとらわれがちである。これは非常な間違いです。教育そのものが大きな間違いをやつて



いる。私は50年間、教育界にいたわけですが、もう本当に愛想をつかしてしまった。私は高等学校の校長を10年間やってきましたが、全国私立高等学校校長会議でも私は言ったんです、

「校長先生がた、山に籠もって少し瞑想してから、教育にお関わりになつたらいか
がですか」

なんてね。私がそんなことを言うものだから、皆が笑つたり、手を叩いたり、

「あの校長は変わり者だ」

と。私はもう三回くらいそのことを言いましたから。

文化文明の根底には宗教がなければ絶対にダメなんです。また、それは根底になるような宗教でなければダメだ。宗教の世界は根っここの世界です。道義、道徳は幹の世界です。それから、枝葉、そして花が咲いて果が実る。これが文化文明です。よく、宗教を文化の中に入れて言うひとがたくさんいますけれども、私はそれは思わない。宗教というのは特別の世界です。いわゆる文化文明の一環ではない。これは土台なんです、根っこなんです。まさに、根幹という言葉が表している。根幹枝葉花果ということ。根は宗教で、幹は道徳、枝葉花果は文化文明です。花は芸術の世界と言つてもいい。政治、経済、実業、学問と、いろいろなものがある。

根（宗教）は見えない世界ですから、見えない世界は概念的なものでもつて把握のできない世界です。幹枝葉花果はいろいろ概念的分析が必要ですから、知の世界が大事です。ところが、根の世界にいくと、超知なんだ。いわゆる知の世界を、判断の世界を超えなくてはいかん。キリストやお釈迦さんというのはまさにこここのところにいる。だから、何と言つたつて、キリストとお釈迦さんは世界の二大人物で、これを抜きにしたら、どうにもならんと言つていい。

キリストの福音と仏教とはひとつも喧嘩しません。天界でイエスも釈尊も喧嘩なんかしていない。孔子だつてそうです。キリストは愛と言ひ、釈迦は慈悲と言ひ、孔子は仁と言ひ。表現はいろいろですけども、みな愛に関わる概念です。

●永遠の生命

誰だつて、生きたいわけです。死んでも死なない生命が欲しいわけです。キリストはそれを与えようとしている。

「私を信ずるものは死なない」

とキリストは言っている。相対的な死なんていうものは問題でない。死を乗り越えてしまつていく。いわゆる相対的な生だとか死ではなくて、絶対的な生です。これが「永遠の生命」という。「永遠」という言葉は、ただ時間的に無限という意味ではない。質的に滅びないものを「永遠」という。キリストはそういうものを与える。彼自身がそういうものを持つて



いたから言えたので、持たないひとはそんなことは言えない。福音の世界は、「喜びの音信」おとずれというのは結局、そういう生命になったら、もう何をしようが、どんなことになるうが、絶対^{絶対}にへこたれないことになるんです。

何をしていようが、みんな結構なんです。日本人は、それがダメですよ。そういうことがどうしてわからないか。何か、大学でも出れば偉いかと思ったり、博士号でももらえば偉いかと思ったりする。そうじゃない。

キリストが与えようとしているのは、そういう永遠の生命の世界です。今日は、皆さん、この私の話をお聞きくださって、もう楽しくてしようがなくなっていただきたいわけです。

●一極絶対

では、マタイ伝6章に入ります。私はなにも聖書の解説をするわけではない。キリストが言おうとしているのは何かというと、

1 汝ら見られんために己が義を人の前にて行わぬように心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。

要するに、人が見る見ないということとは問題ではないということなのです。

2 さらにば施濟をなすとき、偽善者が人に崇められんとて会堂や街にて為すごとく、己が前にラツパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。3 汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。

我々は、右左がある。右の手と左の手がある。これは相対的概念です。右と左は相対している。

「右の手のなすことを左の手に知らすな」

ということとは、

「左がないと同じことだぞ」

ということとは、

「この右が即ち絶対的なものになれ」

ということとは、これを「一極絶対」と言う。一つの極が絶対である。即ち、他の極を持たない。

「一極絶対の境地に入らないと本ものになれないぞ」

ということとは、人と比較して、

「あの人はどうだ、この人はどうだ。私の運命はどうだ。私の才能はあれと比べると、

どうも神さまは不公平だ」

なんてやっているのは、みな相対概念です。そういうことをやっているうちはダメだ。ですから、

「右の手のすることを左の手に知らせるな」

とは、右はもう相対的な右でなくなるわけです。ということとは、絶対者と通じていること



になる。絶対者、神さまと通じている。横の関係はない。この絶対関係です。神さまと通じている縦の関係を絶対関係と言います。相対を絶したところの関係なんです。相手が絶対者だから仕方がない。Aの人も、Bの人も、Cの人もみんな——お互いが仲良くしましようなではない——先ず神さまと仲良くなくてください。そうしたら、おのずからこのA、B、Cの連なりはできてきます。しなくたって、できてくる。これは上からお互いに流れていく。そういうのが本当の宗教の世界なんです。

だから、そういう絶対が来ると、そういう「右の手」は本当に安らかになる。これを平安という。力が来る。「神はわが力」というのはそういうところなんだ。神さまだけを相手にして、他は見ない。自分も見ない。人も見ない。天界だけ、霊界だけを見る。

●神さまの中に自分が入っている

私が今、こういうことを言うでしょ。言うと同時に、私はその世界に入ってしまったんですよ。力がグーッと来るんです。もうたまらないです、私は。そうすると今度は、皆さんに楽にお話ができるわけです。これを普通はやってない。

「私は神さまを信じています」

なんて言って、自分が立って、「神さまを信じている」なんて、そういうのはやはり、この関係が相対になっている。そういうのはダメなんです。相手を、神さまを、

「ああ、あそこに太陽がある」

なんて言って見ているのと同じことです。

光は見えますか？ 光は見えない。見ようとすると、向こうの森が見えるだけだ。森が見えるためには、光が来ているから見える。その光の中に自分が入ってしまった。それが本当の絶対的な関係なんです。神さまの中に自分が入っているようなことになったときに初めて、神との関係が立っている。

神を対象にして——ここに花があるが、花を見ているように——対象にしているうちはダメなんだ。花だってそうなんですよ。花を見ている。花を見ているけれども、本当に花を見ている人は、この花の心の中に自分を入れてしまう。花を見れば、花となる。そうしたら、その人は本当に花を見ている人なんです。この花弁の形がどうで色は何色でと、認識しているうちは、まだそれは認識の世界です。認識の世界は文化文明の世界です。花の心の中に入って、

「私はもう菊です」

と。

「菊が我が、我が菊か」

という、そういつたときに、本当にこの花がわかつているんです。花を「知る」ということは、知的に知るのではない。花となったときに、本当に「知る」という世界です。神と

一つになったときに、本当に知るという。

「神を知る」

というのはそういうことなんです。この「知る」は普通の知るとは違う。いいですか。そういう絶対の世界に入ると、これはもうたまらなくなる。私はその世界に入ると、自分の声がでなく（異言に）なってしまう。

3 汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。

それで、施しをしていても、施しをしているような気持でなくなってしまうわけです。キリストは「左の手に知らすな」と仰るけれども、

「左の手は知りませんよ」

と、今度は逆にキリストに答えてあげなさいよ。

「ああ、そうですか。それはむしろかしいことですね」

なんて言っているうちはダメなんです。

「左の手なんか知りません。もう忘れましたよ」

と。私なんか忘れっぽいので、非常にありがたい。すぐ忘れてしまう。

●神隠れ

4 是はその施濟の隠れん為なり。さらば隠れたるに見たもう汝の父は報い給わん。

神さまの中に施しが隠れるためにと。この「隠れる」ということは大事なことだ。神隠れになってくださいよ。本当の世界はその中に没入する世界です。そうすると、隠れてしまう。隠れんぼしてしまふ。その中に隠れてしまふ。影が見えない。

「あれはどこに行ってしまったか」

と。そうしたら、

「神さまの中にいた」

なんて。仏さまの中にいたとかね。如来と一如になっている。「一如」とは素晴らしい言葉です。また、「如来」とは、「来るが如し」と書く。来るが如しで、来たか来てないかわからない来かたが本当の来かたなんだ。それと一如になる。仏教には素晴らしい言葉があるから、私はどしどし使わせてもらおう。

日本語はよく主語を略すでしょ。誰が言っているんだかわからないような。あれで、日本人というのは非常に融合の精神が自ずからあるわけなんだ。大事なものを日本人は本来持っている。「即如」ということ。

道がそうなんだ。華道、茶道、柔道、剣道、弓道という。術とは言わない。これは道なんです。道というのは、自分で歩かなければ本当はわからない。自分の身につかなければ、道とは言えない。頭でわかっている世界ではない。身についた真理を道という。



今の学校教育はどうですか、おおよそダメだね。分裂していて。真理を身につけている先生が少ないので本当に嘆かわしい。本当の教育ができるかというんだ。私は学校から出たから、学校の悪口は言いたくはないけれども。本当にそうなんです。

●超我

「隠れたるに見たもう」

というのは、今度は神さまの中に本当に自分を隠してしまったなら、右も左もなくなってしまう。自由自在になる。「自由」ということも、今普通に言っている自由なんてものはひとつも自由ではない。それは勝手気儘きままという。勝手気儘は自分に捕らわれている。自由とは自分からぬけることをいうんです。自分から抜けなければ、本当の自由ではない。自我から抜けなければ。

これは西郷南洲がはつきり言っている。私は南洲は明治の最大の人物だと思っている。

「道は天地自然の道なるゆえ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己こつきを以て終始せよ。」

克己おのれとは己かに克かつこと。己を乗り越えること。超我することです。

「己おのれに克かつかの極功きよくは『意母なく、必母なく、固母なく、我母なし』(論語)と云えり」

みんなこれは我執的な言葉を言っている。自分の意志だとか、必ずこうであるということを決め込んでみたり、固執してみたり。要するにこれは全部、我執のことを言っている。

「総じて人は己おのれに克かつを以て成り、自ら愛するを以て敗やぶれるぞ。」

自愛は敗れる。よく手紙で「己おのれを愛ください」と書くが、あれは本当はよくない。南洲に言わせると「敗れるぞ」ということなんだ。自愛を進めると敗れることになる。

「己おのれを愛することは一番悪いことだ」と。

●己を棄てて友を救う

ところが、キリストの言葉の中に、

「己おのれを愛することく、隣人を愛せよ」

という言葉がある。これは躓つまずきますよ、

「では、己おのれを愛していいんだな」

なんて。

「『己おのれを愛することくそのように隣人を愛せよ』と、そんなことができるか」

という。あのキリストの言葉に躓つまずかないでください。

「己おのれを愛するということがいかに人間の生まれつきの本能であるか。己おのれを愛する」とはそれほど強い。その強さをもって他人ひとを愛せよ」

ということですよ。



「こつち（自愛）はやめろ」ということなんだ。そこまでキリストは言わないけれども。仏道でもキリスト道でも要するに、これ（己）を滅却することなんです。

教育界で一番素晴らしいひと、ペスタロッチという方が、

「自分のためには何ごとをも思わない。一切は他人のために」

（フュア ズイツヒ ニツヒツ、アツレス フュア アンデレ）

と言った。これが彼のモットーであった。彼の墓碑銘にそう書いてある。

愛するとは、ただ可愛がることではない。愛するとは他人を助けること、救うことです。

「己を棄てて友を救うこと。これより大なる愛はなし」

と、キリストが言った。それはどうしてできるかというところ、力が来なければできない。我慢したって、そんなことはできない。それはどういう力かというところ、上から来る力です。絶対の力がこないとダメです。慈悲の本願、弥陀の本願の劫力という。神の本願の力です。

「本願」というのは素晴らしい言葉です。これも私はしよつちゆう使っている。「本願道」という詩を書いた。『無者キリスト』（小池辰雄著作集第一巻（初版））の終りの方に出ています。

「隠れたるに見たもう」

とあるから、

「神さまは見ている」

なんて思わないで、神さまの中に隠れてくださいさいよ。私はキリストの言葉を、そのようにもうひとつキリストがびつくりするように使う。「私が」ではないですよ、私の中に霊が来るから、御霊がそのことを言う。キリストも「そうだ、そうだ」と驚いて仰っているよ。「隠れたるに見たもう」なんて、

「あなたの中に私は隠れていますから、見えませんよ」

と逆に言うくらいだ。「報いたまわん」なんて、

「報いは要りません。あなただけが最大の報いですから、他に要りません」

と神さまに言っただけでやりなさいよ。まあ、私は乱暴ですよ。乱暴だけでも、これは真理ですよ。仕方がない。

「キリストの言葉も勝手に使っている。あいつはしょうがない野郎だ」

なんて。いいよ、何と言われても。私には確信があるから。

神・キリストと一つになったら、正直、もう問題がなくなってしまう。何がどうなったっていいですよ。完全に勝つてますから。勝つというものは、相手を救いあげてしまうこと。私はさんざんいろいろなことで誤解されたり、悪口を言われたり、孤軍です。ところが、天に万軍がいる。孤軍万軍、何をか恐れん。痛くも痒くもない。どうして、私はこんなことになったかね。生まれつき弱虫の、泣き虫の、そういう男です。ところが、それが逆になっちゃった。大言壮語しているのでも何でもない。



●戸を閉じて

5 なんじら祈るとき、偽善者の如くあらざれ。彼らは人に顕あらわさんとて、会堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報むくいを得たり。6 なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在います汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給うなんじの父は報い給わん。

「戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ」

とある。そうするとみな、

「ああ、戸を閉じて祈らなくては、本当の祈りにならない」

なんて思っている。ダメだよ、それでは。言葉の末にこだわることはない。キリストはそう仰ったが、「戸を閉じて」とはどういうことか。私は「戸」を持っている。目をつぶったなら、これは「戸を閉じた」ことになる。電車の中であろうとも、目を閉じて瞑想して、人の声が聞こえようが、電車の音がしようが、いくらでも祈れるんです。霊の世界は、肉の耳に聞こえていることなんか問題でなくなってしまう。これは本当ですよ。

私ももう何十年と、そうでないキリスト教をやってきました。もう疲れてしまいうよ、そんなキリスト教は。だから、一般のキリスト教はダメなんです。キリストの道、キリスト道に、使徒たちが本当に捕まえられた道に、「元始に帰れ」ということです。元へ帰れと。仏教でもそうです。元始に帰れと言う。

「己が部屋」なんて言っても、部屋なんかあったってなくたって、そんなことはどうでもいい。自分自身が部屋です。自分自身がちゃんと戸を持っている。そして、「隠れたるにいます」見えない世界、その「父に祈れ」と。

「隠れたるに在ます父の中に隠れる。父の懐の中に入ってしまったえ」

というんです。これはヨハネ伝に、イエス・キリストは

「父の御懐の中にあつた独子ひとりご」

と書いてある。「父の懐の中に」という表現で言っている。そうすると、一般の仏教の人は、なんて言う。そうじゃない。人間の表現としては、「父」と言うよりか仕方がない。人格的な霊的な存在を、どうにも言い方がないから、表現がないから、「父」と言う。「母」と言っただけいい——カトリックなんかは、「マリア」さんを一生懸命でやっているけれども——

相対的な人間は絶対的なものを相対的な表現で言うよりか仕方がないから、そう言っている。けれども、「父」という表現は暗号なんだ。「父」と言われているものは絶対者なんです。

●神秘界

イザヤ書26章20節に、

「²⁰わが民よゆけ、なんじの室へやにいり汝のうしろの戸をとじて忿恚くらやみのすぎゆく



まで暫時^{しばし}かくるべし。」(イザヤ26・20)

なんて書いてある。「戸をとじる」という字はギリシア語で「ミオー」(隠す)という動詞で、「ミステイク」(神秘)という字はこの「ミオー」という字から来ている。「隠れたるもの」ということで「神秘」という。「神秘」とは素晴らしい訳だね、神隠れなんだ。

私が育ってきたところの無教会は、「教会は要らない」という内村鑑三の無教会主義です。内村先生はもちろん偉いし、いい加減な人とおよそ違う魂だけでも、この「神秘」ということに対しては非常に警戒された面がある。私は先生がこれを否定したと言っているのではない。それで、無教会の信仰には「神秘」という言葉はほとんど出てこない。

宗教が神秘でなかったら、どうするんですか、神隠れでなかったら。根っここの世界に見えない世界に隠れなかったら。たくさんここに木があるが、根っこが見えますか。ひとつも見えない。根っこが見えるような木だったら、枯れてしまうよ。生き生きとして葉があるのは、みんな根っこを持っているからだ。根っこは見えない世界です。人間も、見えない隠れたところの宗教を持たなかったらダメなんです。だから、私は、

「万人は宗教人である。本来は宗教人であるのに、なぜ宗教のことをいい加減にしているか」

とはつきり言う。私は今、75歳だけれども、これからあと何年地上にいるかは知らんけれども、死ぬまで戦いますから。冗談言うなど。

「隠れたるに在す」

ということば、そういう神秘界です。

「神秘界に在りたもうところの神さまと一緒に、この現実を神秘界とせよ。ここが相対的現実でありながら絶対的現実だぞ」

ということばです。この部屋の空気はどうですか。相対的な空気でしょ。これだけの空間しかない。ところが、これは外界とつながっている。だから、これは絶対的空間になっている。この空間が相対的でありながら、絶対性を持っているんです。もし、絶対性を持たなかったら、我々は窒息してしまふ。皆さん一人びとりの中に、我々一人びとりの中に、絶対的なものが来なかったら、本当の生きが——「あれは生きのいい人だなあ」なんて言うが——生きのいい人にはなれない。これを持たなかったら生きがよくならない。

「どんなに迫害されようが、どっこい」

と、逆に力がくる。いいですか、現実にかけてはいかんよ。周囲の人に

「キリスト教はどうだこうだ」
なんて、何と言われようが結構です、逆に力が来るから。

私の言っている世界は、いわゆる概念的なものではない。キリストはそういうところからものを言ってるからしゃるからね。たくさん註解書が出て、本当の中心をつかんでいるのはやはり少ないんだ。



● 天の父

9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。」

「天」とは何ですか。もちろん、キリストがおられた頃は、空を仰いで「天」と仰った。我々も天ということを使う。

私も「天」という字が好きだから、いつも使っている。私は自分のことを「天鐘」と書く。梵鐘は天から吊るされているでしょ。これに足場があったら、鐘は鳴らない。天から吊るされている。そして、鐘の中は空で何も無い。西洋の鐘みたいにペロなんてない。空なんだ。外からガンと突けば、ゴーンと音がする。天空に囲まれて、天空を中に宿している。だから、この音は、鳴るのは天か鐘かという。それが「天鐘」という私の号なんです。天と鐘とが一如の世界でなければ、これは鳴らない。地面から支えられたら鳴らない。天から吊るし下ろされていなければ鳴らない。これを天鐘という。

絶対界のことを「天」という。宗教界のことをもし総合的な表現で言うと、天と言うよりかしようがない。中国でも孔子が「天」と言っているでしょ。神、仏、如来、何でもいいよ。それは総合的な言い方では天なんです。絶対界ということですよ。

「絶対界に在すところの我らの父よ」

と。「父」という言葉はもう旧約聖書から来てます。新約聖書は旧約聖書からきています。ユダヤの宗教を全部、総まとめにして、そしてそれをひっくり返してしまったのがキリストですから。申命記32章6節に、

「愚かにして智慧なき民よ、汝らがエホバに報ゆること是のごとくなるか。」

エホバは汝の父にして汝を贖いまた汝を造り汝を建てたまわずや。」(申命記

32・6)

とある。「エホバ」というのはイスラエルの神さま。

「エホバの神さまは父であって、贖い主であって、創造者であって、建設者であった」と。畳みかけて書いてある。

「イスラエルの神さまは親しいお父さんだ、依り頼むことのできるお父さんだ。それから、創造したひとだ、エジプトから贖い出してくださいったひとだ」

と。「エホバ」というのは本当は「ヤーヴェー」という言い方で、「実存者」という意味です。本当に存在しているもの。

「在りて在らしむるもの」

です。そういう言い方をするのは私一人ですけれども。普通は「在りて在るもの」と言う。「ヤーヴェー」(実存者)という字を、経典を読むときにこの字がくると、「アドナイ」(わが主)と読んでいた。「アドナイ」という母音と「ヤーヴェー」という子音を混ぜたら、「エホバ」という発音になる。だから、「エホバ」というのは間違った読み方だったけれども、これは



面白い。

「実存者にしてわが主」

なるものだから、私は「エホバ」を「実存主」と訳す。これも私しかやってない。

「エホバ」の神さまは、これはなにもイスラエルの神さまに限らない。我々が「エホバ」と言つて一向差し支えない。

「実存者にして主なるもの」

ということ。

「あれはイスラエルの神さまだ」

なんて、そうじゃないですよ。イスラエル人が始めは呼んだけれども、これは全世界の神です。キリストは「父」と言った。何と言つたつていいですよ。

「絶対界に在す我らの父よ」という。「我らの」という前に先ず、「わが」ということを言わなければダメですよ。本当に「わが」になつていなければ、「われら」と言つたつて、そんなのはいわゆる集合的な、衆愚的な概念であつて、先ず「わが父」と言えなければ。あなたがた一人びとりの「わが父」です。そして、みんなと一緒に「われらの」ということが言える。ただみんなで一緒に、ただ「われらの、われらの」と言つていたのではしょうがない。独りになったときに、どうしてくれるんですか。

●たとえばこう祈れ

9 この故に汝らは斯く祈れ。……

キリストは、

「まあ、たとえば、こう祈れ」

と言つた。それなのに、キリスト教界ではこの「主の祈り」をもうお題目にしてしまつて、みんな知つてます。そして、礼拝のときにいつもこれを祈っている。もう空念仏だ。だから、私はああいうことをしない。ドイツでもドイツ人はみな「主の祈り（ファーター・ウンゼル）」というのをやっているんだ。私はそれを言わないで黙つていたものだから、牧師が

「なぜ、あなたはやらないか？」

と聞くから、

「私は自分の勝手な祈りのときにその主の祈りの中の文句が出てきます。けれども、こうやつてお題目式な、形式的な祈りは私はあまり好きでないから、やらないんです」

と、はつきり言つてやつた。まあ、「変わった日本人がいる」と思つたでしょうね。真理とこののは何も恐くない。その「真理は恐くない」ではつきりものを言つていたのは内村鑑三でした。あのひとは本当にそうでした。内村先生というのは、

「なんだ、お前たちはクリスチャンのくせに。神を知らない人でも、私にこういう



ものができましたと言って、くれるじゃないか。クリスチャンのくせにそういう行為もできないのか」

なんて、逆にやつつけられる。

「神を知らない人の方が愛があるぞ」

と。そこに本当の真実があれば、何でも認めるひとです。概念的に決め込んだようなひとではない。キリストの真理をいわゆる神学で固めたようなものは嫌いだから。

「神学なんてやっていると信仰がおかしくなる」

と言って、無教会に神学がない。

けれども、私は反旗を翻して、神学を言いだした。それは今までの神学とは違った神学である。本当の神学は、神学を笑う神学である。そういったような意味で「無教会神学論」というのを書いた。

「無教会にも神学が現れた」

と新聞に出たよ。とにかく、いいよ。今度は私は第三巻の『無の神学』に書くから。そして、時間があつたら、ドイツ語でも書いて、世界に訴えてやる。そういうように、少しも恐いものはない。それは私が何か自分で言っているのではないんだ。上から来ているから。

●御名が聖とせられんことを

9 この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を。」

この「御名」が大切なんです。「御名の崇められん事を」というのはまだ言い方が足りない。と。

「御名が聖とせられんことを」

「聖なるものとして讃えられんことを」

ということですよ。皆さんのお名前を一人ひとりお呼びすると、そのお名前でその人の全体がその中にこもっているわけですよ。その人自身が一番知っているんだ。「小池」と言えば、小池というものがどういうものだということは、私自身が一番よく知っている。皆さん一人ひとりがそうなんです。「名」が即ち「実」をちゃんと表わしている。実の暗号なんだ。本当は、名実即しているんだ。だから、キリストが「父よ」と呼ぶときに、キリストにあっては「父よ」が名なんです。「父よ」という一言でもって、もうキリストは父の中に入ってしまったている。隠れてしまう。祈りというのは「その中に入る」ことなんです。

「南無阿弥陀仏」の「南無」がそうです。これは帰依、帰入すること。帰入する。また私は祈入とも書く。祈り入る。

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」



こんな素晴らしい言葉はない。私は仏教徒よりかその境地を知っている。それはもう親鸞の『歎異抄』なんていうのは大変な本です。法華経にしろ何にしろ。もつと私は勉強したい。日蓮は妙法なる蓮華経の中に自分を没入させてしまっている。だから、

「お前はこれをお経を頭で読んだってダメだ、心で読んでもまだダメだ、身からだで読め」と言った。「身読」と言った。そういう読み方をしている。読めば、直ちにその世界に入るような読み方です。

「父よ」と呼べば直ちに、「主よ」と呼べば直ちに、その中に入っていく。祈ることは先ず自分を投げ入れること。お願いするなら、そこからいろいろなことをお願いしなければダメだ。入らないでいて、お願いばかりしているんだ、みんな。そんなのはご利益教という。入ってしまったから、それからお願いするときは、もう自分がない。本願を祈ることになるから、これは成就していく。けれども、人間の相対的現実では、直ちに成就するかは知りませんよ。

「すぐ成就しなかったから、私の祈りはまだ間違っている」
なんて、そうじゃないんだ。

「祈ったら、直ちに聞かれたりとせよ」(マルコ11・24)

とキリストは言っている。根源の現実では聞かれているんだ。それが現象するのは、即刻現象するか、何年後で現象するか、そんなことは神さまの方の判断のはなしだ。現象しようがしまいが、祈ったことが直ちにその中に入って聞かれている。自我のない祈りはそうなんです。だから、力がくるんです。祈れば、直ちに力が来る。

「そうなるだろうか」

なんて、蓋然性がいぜんの祈りはいくら祈ったってどうにもならん。

●御名に在りて

だから、「御名によりて」ではない。これは「御名に在りて」なんです。の中にいなくてはいかん。御名に在りて祈らなくては。実じつの中に入って祈らなくては。

「御名が聖として崇められことを」

ということですよ。「聖」という言葉がまた躓つまずきになる。「神聖」とか「聖書」とか言う。いいですよ。けれども、これはただ汚れたる世界とただ「分かっ」ばかりではない。もちろん、これは「分かれたら」から「聖」なんだけれども。この「聖」は汚れたる闇の世界を聖なる世界に変えようとしている、もの凄い熱を持っている。愛を持っている。生命を持っている。そういう「聖」ですから。イザヤ書57章15節に、

「¹⁵至高いとく至上たかなる永遠とこしえにすめるもの聖者せいしやとなづくるもの如此かくいい給う、我はたかき所ところよき所にすみ、亦またこころ砕けてへりくだる者とともにすみ、謙へりくだるものの霊をいかし、砕けたるものの心をいかす。」(イザヤ57・15)

「聖者せいしやが下くだつてきて、心砕けたる者と共に住み、それを生かす」



と書いてある。ですから、聖者（神）の中に私たちは、そこで「聖徒」とされるわけだ。手放して「聖徒」ではないですよ。神さまの僕となることです。恵まれたる徒、恵徒と言ったつてかまわない。私は「恵信者」という言葉を自分で作ってしまった。「信者」という言葉があるけれども、「信者」の前に、まず恵まれたる者なんです。神さまの恵みを、生命を、力を受けている。これが元なんです。

「恵みにより、信仰によりて救われる」

という。恵信者です。ヘブライ語で「ハツシデイム」という言葉があるが、「ヘセッド」という言葉は「愛、恵み」という言葉です。あれを「敬虔者」とか「信者」とか訳しているけれども、本当は恵信者なんです。

「天にいます我らの父よ、願くは、御名の崇められん事を」

ということとは、本当に

「南無キリスト！」

と言って、キリストの中に祈入する。そして、御名が聖として崇められる。ただ崇められているだけではなくて、その中に入る。先ず、御名の前に平伏さなくてはいけない。

「参りました！」

と平伏す。私はよく言っている。「聖書研究会」というのがたくさんあるけれども、ダメだ。研究は悪くはない。私も研究する。けれども、研究ではその世界に入れない。「降参しました」ということにならなくては。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書を読んで、

「あなたには参りました！」

と、キリストにまったく平伏して降参すると、その中に入れる。それまでは、こっち側で自分というものを置いて、

「さあ、何だろうか、この言葉は。あの行為は何だろうか？」

なんて、研究したつて絶対に入れない。頭でわかったつて入れません。もうはつきり言っておきます。いわゆる神学者たちが本当の信仰を持っているかという、持っているかないから。

この頃、いろいろな本がよくある。読んでみると、いろいろな角度から研究してものを言っている。けれども、大事な核心に入っていない。私はちゃんと見てますよ、独りよがりなものを言っているのではない。みんなご苦労さんなはなした。それをけなしはしない。研究は結構だから。けれども、ご苦労さんなはなした。中に入っていないから。

皆さんは、そういった二義的、三義的なことではなくて、第一義的な絶対次元の中に入ってくださいよ。そうしたら、聖書は楽しくてしょうがないから。読んでいるうちに、どんな力が来てしまうから。



● 御国は来ている

10 御国の来らんことを……

「御国」というのは神さまの、キリストの支配しておられるところということ。統御しておられるところ、そこが御国なんです。それが来るようにと。実は本当は、御国は来ているんですよ。キリストはちゃんと、神さまはちゃんと統べ治めている。ただし、今はサタンの勢力に、「勝手にしろ」と言つて、一応ある面は委ねている。だから、サタンの手下になって、悪いことをさんざん人間はやっている。けれども、神さまはひとたび、ある時が来れば、みんなひっくり返してしまふ。そうしたら、サタンとサタンの手下はみな地獄行きだ。このサタンの混沌たる世の中においてなお義ただしきことを、本当の愛を生きているひとたちは——これは天国人だから——それはみんな天界へもつていかれる。今はゴタゴタだけれども、ちゃんと神さまの方では見ている。

「神さまがいるのに、こんな不公平があつていいものだろうか」

なんて、そうやってまだ客観的に判断しているうちはダメなんです。自分自身が神の中に入れば、あとはどうなつたつて構わない。「構わない」ということは、なんとかして一人ひとりを救つてやりたいということなんです。他はどうなつたつて、仕方がないよ。いろいろな悪いやつがいるんだから。彼らが悔い改めないかぎり。

あの「麦と毒麦」の話（マタイ13・24～30）があるでしょ。麦の種をせっかく蒔いたのに、何だか知らないけれども、毒麦も現れてきた。召使が、

「毒麦をみんな刈つてしまひましょうか」

と聞いたたら、主人は

「良い麦も一緒に刈つてしまつてはうまくないから、放つておけ。やがて収穫

のときが来た時にはつきり、毒麦は毒麦として分かるから、そうしたら、こ

いつはみな束ねて焼いてしまへ」

と。これは、天国が来る時に、最後の時には皆そういうものは焼かれるように審かれてしまふ。しかし、その中であつて本当の生き方をした者はみんな天界に行くということです。

「人の判断はどうでもいいから、お前はとにかくしっかりと絶対に屈するな、神の

義を生きてよ」

と。神の御意に従つて生きることが「義」という。

「御国の来たらんことを」

とあるが、御国は来ている。御国はそうやって神さまが支配しているところに在るから。

「私は御国の中に居ますよ」

と。神を本当に神とし、キリストをキリストとして交わっている世界は御国なんです。終末の御国が来ることを祈っていることは、今、御国の中にある人が本当にその祈りができる。歴史の終末に神の国が来ることを祈ることのできるひとは、今、その中に現実にい



るひとたちです。だから、「御国の来たらんことを」と祈るときに、自分がその中にいなかったら、空念仏です。キリストと一緒にいることが御国の中にあることなんだ。お釈迦さんと一緒にいることが極楽の中にあることだから。

「極楽は東になし西になし来た道さがせみみな身にあり」

という。「極楽はみんな身の中にある。どこを探しているんだよ」という道歌があるじゃないですか。極楽は西方楽土にあるということも言っちゃって悪くはないけれども、お前さんの身の中に極楽が来ているではないか。それをそっちのけにして、どうしてくれる。東西も南北もないんだぞ、お前が中心だぞと。

●無者キリスト

10 みくに御国の来らんことを。御意みこころの天のごとく、地にも行われん事を。

天界では、霊界では、神の御意は成っている。地界においてもそのように成ってくださいと祈っている。これは非常に大事なことです。これは「主の祈り」の一番中心です。

「御意の天に成るごとく、地にも成らせたまえ」

と。「地にも成らせたまえ」とは、傍観しては困るよ。

「どうぞ、私をお使いください。私を通して成ってください」

ということ。「御意を成させたまえ」というのは、

「御意を私を通して成させたまえ」

ということ、自分を提身していなければダメです。我を通して、我を貫いて成してくださいと。提身しなければダメです、身を提していなくては。「御意を成させたまえ」というのは提身の祈りなんです。キリストの祈りはこれが中心だったんです。

「わが意こころにあらず、汝の意を」

という。そして、自分を棄ててかかった。だから、キリストを通して100%に神さまの言葉がやってきた。神さまの行為が展開してきた。だから、私はキリストのことを「無者」と言っている。自分を何者ともしてないから、無者、無者キリストです。

「無者キリスト」

なんてまだ誰も言わない。私がないから、無私者です。だから、キリストが

「我を見し者は父を見しなり」

と言った。

「私を見た者は神さまを見たんだよ」

ということが言えるひとは完全に自分のないひとなんです。

●十字架の贖い

これが我々は手放しできない。手放しできないのなら、どうしたらいいか。そこに



キリストの十字架がある。

「お前の我執は全部、十字架に付けたよ」

と、これがキリストの贖罪の十字架なんです。「罪」とは我執のことですから。

「我執は全部取ってしまった。相変わらず、お前はダメだけれども、そんなことはもう心配はいらん」

と。我々は相対的に「罪びと」で、死に至るまでダメなんだ。けれども、この十字架を受けとった私は「義人」なんです。神との関係がはつきり立っている。信仰における義人です。手放しの義人ではない。人間小池なんてのはダメな野郎、破れ器にすぎない。けれどもキリストの十字架によってそいつは贖われてしまった。そして、これを受けると神の霊が、聖霊が入ってくる。福音書では、いくらペテロやヨハネやヤコブがキリストと一緒にいたって、キリストの霊は彼らに伝わらないんです。十字架の贖いを通っていないから。

「お前たちはまだダメだ。今に、私を棄てるぞ。みんな散ってしまうぞ。けれども、

やがて私が十字架に懸かるから。そうしたら、天界から聖霊を降すから、お前たちは私がしたり言ったりしたことが全部わかるぞ。お前たちは今度はすっかり変

えられるぞ」

ということをちゃんと約束している。その通りになった。ペテロもヨハネもヤコブもそのように成った。ということは、十字架の贖いを通さなければ聖霊はやって来ないんです。地上のキリストからは直接には来ない。キリストと弟子たちとの違いはケタ違いです。ケタ違いだから、ケタ違いの中に入れない。しかし、十字架の贖いを通ったら、今度は、キリストのケタ違いの中に入ったから、今度はペテロはケタ違いのひとになってきた。使徒行伝のペテロはそうじゃないですか。

「**金銀は我になし。わがうちに在るものを汝に与う。キリストの名によって歩め**」

と言ったら、生まれつきの跛者あしなえが立ってしまったではないですか（使徒行伝3章）。キリストの力が働いたから。

ああいうことをいわゆる神学者がわからないんだね。お気の毒なはなしだよ。地上にいたキリストも一時的には彼らに力を与えましたよ。けれども、それは一時的だから、ダメになる。今度はダメにならないんです、

「それは十字架を通っているから」

と、なぜ神学者がはつきり言えないか。私はおかしくてしょうがない。私は自分で体験しているからはつきり言える。私みたいな者を通したって、既にいくらでも不思議なことが起きているんだから。これはしょうがないです、事実が証明しているんだから。

「**御意の天に成るごとく、地にある我を通して成させたまえ**」

ということですよ、皆さん一人ひとりを通して。



「小池先生はできるでしょうけれども、まだ私はとても……」
 なんて、そうじゃない。あなた方は即刻できるよ。時間の問題なんかじゃない。これをはつきり受ければ。女の方でも、その力をもって勝ってください。大丈夫ですから。

● 一日を力いっばい

11 我らの日用の糧を今日もあたえ給え。

その日暮らしということ。なるほど、人間の相対的な現実では、いろいろなものを蓄えたり、貯金したり、いろいろしますよ、昔と違うから。悪くはないですよ。キリストが

「貯金してないやつはダメだ」

と、あの頃だって、そういうことを言っているところもある。キリストの言葉はまた矛盾しているようだが、そうじゃない。その時その時に、その時のことに合うように真理を語っているんだから。何だかっていいんだ、そんなことは。とにかく、本質的には、一日一生——これは内村先生が言われた——その日暮らし、ということですよ。

その代わり、一日を力いっばい生きる。本当に生きたひとはみんなそうだ。瞬間、瞬間に身を投ずるひと。我々はみなそうです。勉強だって、そうです。時間の長さではない。質的にグーッとつかまえる。周りで何してようが、そんなことは気がつかないような集中力です。そして100%にやったら、

「神さまは決して飢えさせません」

というわけです。ところが、泡のような金をつかんだようなやつはまたそいつを必ず逃がしてしまふ。

● 天来の愛

12 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え。

「負債」という言葉は先ず金の財的なことから来るけれども、今度は、道徳的な意味で、自分に対していろいろな過ちをしたり、自分を迫害したりした人、そういった悪い人たちを許しましたということ。なぜ、許すことができるか。人間はなかなか許せないんです、

「あの野郎！」

というわけで。ところが、「あの野郎」も許すことができるのは、「私」がキリストの十字架によって贖われて許されたから。私という罪びとがキリストから100%に絶対的に許されたから。許されたから、許す力が来ている。

もう、私はかれこれ40年伝道しているけれども、いろんなのが出たり入ったりしているよ。本当に「あの野郎」という者もいますよ、失礼なやつが。けれども、私は決して怨みません。その人が本当に立ち帰ってくれば、「立ち帰る」と言っても、私の方に帰って来るということではない。キリストに立ち帰ってくればいいんです。



教会というのは、会員が教会から出ていくのは非常に難しいらしいね。私の集会は、出ようが入ろうが、去来自由なんだ。ただ出て行けば、自分が損するだけだ。本当の世界から逃げていくだけの人はなした。出て行った人のうちには、しばらくたって気がついて

「やはり、私は悪かった」

と帰ってくる人もいるよ。「悪かった」と言う人は、私は決して咎めません。

「ああ結構です」

と。しかし、また試しになんか来やがったら、

「出て行け！」

と言う。キリストの十字架で許されていながら、他人を許さなかったら、私の祈りは聞かれません。許さない者の祈りは、キリストは聞かない。私は許されているから、相手を許す。人間小池が許すのではない。神さまが私を通して許したもう。だから、私の祈りは聞かれる。あなた方は、楽でしようがないですよ、こういうお話を聞いたら。何もこだわりがないでしょ。楽でしようがない。だから、福音という。楽音らくいんと言ったつていい。キリストの楽しい音だ。ひっくり返すと音楽になる。福音というのは音楽と同じなんです。楽しくて力があつて、相手を救いあげる。正しいことはちゃんと見分けがつく。そして、決して裁かない。全部、呑み込んでしまう。全部呑み込んでしまつて、そこでもつて靈的変化を起こさせてしまう。その力を持っている。それが無いのを

「パリサイ信仰」

と言つて、相手を悪く言う。

「私は良いんだ。私の信仰は間違つていないが、あれは間違つている」

なんてやつているのは「パリサイ信仰」だ。これはキリストが大嫌いだったんだ。

「偽善なるかな。学者、パリサイ人ひとよ」

と言われた。そういう世界ですから。その中に入れば、聖霊はみんなこれを溶かしてしまふ。聖霊は闇も何も全部溶かしてしまふ。そういうのが聖霊なんです。「聖き霊」というのは審く霊ではない。全部救いあげてしまふ。もの凄い。聖霊の性格は愛ですから。天来の愛です。

